

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
1	C 5750 -4-3	渋谷 隆	84 全体	序文 他		ED	使役表現“させる” 使役表現が多く、気になる。	“低減する”又は“低減できる”	この表現は分科会で検討した結果、「起こりやすさを低減する」よりも「起こりやすさを低減させる」の方が適切ではないかとの判断で「させる」としたものですので、このままとします。 受動態の箇所については、JIS Z 8301 H.1b)の「規定文は、能動態を基本とするが、不自然な場合は受動態としてもよい。特に、対応国際規格を基礎として用いる場合、日本語として不自然な直訳体は避ける。」を念頭に、全体にわたって検討しておりますが、抜けがあるかもしれません。今回「使役表現が多く、気になる」とのご意見を受け止め、今後更に気をつけて検討いたします。
2	C 5750 -4-3	渋谷 隆	87	序文		ED	表現 “適用させ得る。”	“適用することができる。”	JIS Z 8301:2019 は、可能性・能力事項の表現形式として「できる」は用いないと規定しています（ただし、能力を示す場合、文の途中では用いてもよい）。したがって、「できる」は使えません。「得る」の表現は JIS Z 8301 でも使われています。ここも「させる」の方が自然との判断で「させ得る」としました。このままとしますが、今後は更に表現に気をつけて検討いたします。 FMEA can be adapted to meet the needs of any industry or organization. 「FMEA は、いかなる業界又は組織のニーズをも満たすように適応させ得る。」
3	C 5750 -4-3	渋谷 隆	89	序文		ED	“設計及び計画“と異なる階層の用語が並列されている。計画には設計計画、製造計画、検査計画、事業計画などが含まれるため、表現を変更したらどうか。	たとえば、“プロジェクトの計画及び設計の早い段階から”ではどうか。	対応国際規格は、次のとおりですのでこのままとします。 対応国際規格「A preliminary analysis can be conducted during the early stages of design and planning.」

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
4	C 5750 -4-3	渋谷 隆	94	序文		ED	“テイラーリング（以下、テーラリングという。）”としている理由は何か業界で用いる用語が“テーラーリング”であれば、それを採用したらどうか。	注記でテイラーリングということもある。などを追記したらどうか。	修正します。 本文は「テーラリング」だけにして、「注記 JIS Z 8115 (192J-108-08) は“テイラーリング”としている。ここでは、より一般的な“テーラリング”を用いる。」を追記します。
5	C 5750 -4-3	渋谷 隆	238	3.1.13		ED	“発端”と“兆候”がほぼ同一の意味で用いている。 発端：2回 兆候：4回	統一する。	「故障の発端」「故障の兆候」は、対応国際規格では、二つの表現を用いています。今回見直しを行い、「incipient failure」は「故障の発端」、「imminent failure」は「差し迫った故障」で統一します。
6	C 5750 -4-3	渋谷 隆	328 335 336 など	4.1		ED	“参照”が抜けている。	たとえば、（JIS Q 31000 参照）。	ご提案のとおり、「参照」を追記します。対応国際規格も規格番号だけを記していますが、対応する文言の直後に置いています。
7	C 5750 -4-3	渋谷 隆	365	4.3		ED	箇条名“用語”は、“用語及び定義”と混乱する可能性があるため、不適切ではないか。	たとえば“階層レベルと関連する用語”とする。	この「用語」は terminology で、「用語及び定義」の「用語」は terms です。「用語及び定義」は箇条 3 と決まっております、このままで特に混乱を招くことはないと考えますので、このままとします。
8	C 5750 -4-3	渋谷 隆	380	5.1		ED	“これらは繰り返し行い得る。” 許容表現ではないか。	許容表現であれば、“繰り返し行っても良い。”	原文は there can be iterations で、可能性・能力事項の表現形式ですので、このままとします。
9	C 5750 -4-3	渋谷 隆	383	5.1		ED	“/”を用いて複数の単語を記述している。“及び”、“又は”、“及び/又は”などの関係が分からない。	たとえば“記録，特定，規定，記述，表明及び/又は文書化”でどうか。	「/」を「，」に置き換えて、「ある情報を記録，特定，規定，記述，表明，文書化するために、この規格で引用を行う場合は、…」に修正します。 原文は全て「/」でつないでいます。原文がない「及び/又は」を付け加えなくても理解できると考えます。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
10	C 5750 -4-3	渋谷 隆	389	5.1	図 1	ED	“括弧内の数字は細分箇条を示す。” は、図 1 の注記ではないか。	注記として表記する。 また、“括弧内の数字は対応する 細分箇条を示す。と”対応する “を追加すると良いのではない か。	対応国際規格でも特に Note の文字はなく、 Numbers in brackets refer to subclauses とだけ記 しています。「対応する」は追加しなくても 問題ないと考えます。
11	C 5750 -4-3	渋谷 隆	405 450 605	5.2.1 5.2.3.3		ED	“プロセスのシーケンス“ “プロセスのステップ“ ”ステップのシーケンス“ が使われているが、ステップは工程、s シーケンスは順序と理解しているが、 ステップとシーケンスの違いが不明確 ではないか。	違いが分かるように用語を変 更したらどうか。	step は「ステップ」、sequence は「シーケン ス」としています。このままとします。「シー ケンス」は「一続き」「一連のもの」と考 えます。605 行は「活動、タスク又はステッ プのシーケンス」です。特に混乱はないと考 えます。  405 行「ー アイテムの機能又はプロセスのシー ケンスを理解するための方法論又は文書」 ・methodologies or documentation for understanding the item function or process sequence  450 行「特定のアイテム又はプロセスのステ ップは明確に対象範囲の外に置くことが必要 な場合がある。」  605 行「プロセスは、活動、タスク又はステ ップのシーケンスとして表現し得る。」 processes can be expressed as a sequence of activities, tasks or steps

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
12	C 5750 -4-3	渋谷 隆	602 604 605 606 607 608	5.3.2		ED	表現 “得る”	“することができる” または “することが可能である”	次のように修正します。 602 行「分割が可能である」 604 行「分割が可能である」 605 行「表現が可能である」 606 行「分解が可能である」 607 行「識別が可能である」 608 行「含むことが可能である」
13	C 5750 -4-3	渋谷 隆	677	5.3.5.3		ED	“ヒューマンファクター” は“人的側面”と同義か	用語を統一する。	対応国際規格の「human factor」を「ヒューマンファクター」、「human aspects」を「人的側面」としていただきますので、このままとします。
14	C 5750 -4-3	渋谷 隆	751	5.3.7.3		ED	“といった”	“などの”	対応国際規格を確認すると「など」に対応する文言はありませんでした。例の中の文なので、「といった」を「という」に修正します（「又は」があって「などの」は使えないので「といった」としていました）。
15	C 5750 -4-3	渋谷 隆	769	5.3.8.1		ED	“とよい。”	“が望ましい。”	対応国際規格のこの箇所は「can be...」です。現状の「とよい」は推奨のように読めるので、「とよい」は「ことが可能である」に修正します。 「望ましい」は should に対応する推奨事項の表現形式なので、適切ではないと考えます（JIS Z 8301 の 7.3）。
16	C 5750 -4-3	渋谷 隆	775	5.3.8.2		ED	“重篤性” “致命度”と意味が違うのか	用語を統一する。	「重篤性」は severity に対応しています。severity はこの規格の 3.1.12 で「厳しさ」としているため、775 行の 2 か所の「重篤性」は「厳しさ」に修正します。「致命度」は criticality に対応しており、JIS Z 8115 の定義語です（192-03-09）。

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
17	C 5750 -4-3	渋谷 隆	783	5.3.8.2		ED	“管理機能／処置”	“管理機能及び処置” 又は “管理機能又は処置”	「／」を「, 」に置き換えて、「冗長性又はその他の管理機能, 処置」とします。原文は「/」です。
18	C 5750 -4-3	渋谷 隆	786	5.3.8.2		ED	受動態 “評価される”	“評価する”	ご指摘のとおり、「評価する」に修正します。→「厳しさは、明確に識別された共通の尺度を用いて評価することが望ましい。」
19	C 5750 -4-3	渋谷 隆	787	5.3.8.2		ED	“カバーする”	“包含する”	covers に対応しています。「カバー」のまま問題ないと考えます（「カバー」は「診断カバー率」でも使っています）。このままとします。
20	C 5750 -4-3	渋谷 隆	800	5.3.8.3		ED	“アンアベイラビリティ”及び“アベイラビリティ”を用語及び定義に追加したらどうか	“アンアベイラビリティ”及び “アベイラビリティ”を用語及 び定義に追加する。	「アベイラビリティ」は JIS Z 8115 の定義語です (192-01-23)。箇条 3 に「この規格で用いる主な用語及び定義は、次によるほか、JIS Z 8115 による。」と明記しているので、用語追加の必要はないと考えます。
21	C 5750 -4-3	渋谷 隆	807	5.3.8.4		ED	“パラメーター”	“パラメータ”	このままとします。 JIS Z 8301:2019 の H.6 は「外来語の表記は、主として“外来語の表記（平成 3.6.28 内閣告示第 2 号）”による。」とだけ規定しています。この内閣告示は、「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。」と定めています。今回、委員会の同意を得て本則に従いました。 なお、JIS Z 8301:2008 も平成 3.6.28 内閣告示第 2 号に従うという本則は同じでした。既に、JIS K 3600:2000（バイオテクノロジー用語）は、「バイオリアクター」のように長音符号を用いた表記を採用しています。

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
22	C 5750 -4-3	渋谷 隆	820	5.3.9.1		ED	“トレードオフ”	“二律背反”	「トレードオフ」は一般用語ではなく、JIS Z 8115 の定義語です (192J-10-116)。このままとします。
23	C 5750 -4-3	渋谷 隆	821	5.3.9.1		ED	“FMEA を行う必要があるかもしれず”	“FMEA を適用する必要がある場合があるため”	「かもしれず」はご指摘どおり「場合がある」が妥当と考えます。次のように修正します。 「より詳しく FMEA を行うか、又は提言を作成する前に原因解析を行う必要がある場合もある。」 対応国際規格では 821 行～822 行は次のとおりです。It might also be necessary to undertake an FMEA in greater detail in an area of specific concern or undertake causal analysis before making recommendations.
24	C 5750 -4-3	渋谷 隆	822 855	5.3.9.1 5.3.9.2		ED	“必要があるかもしれない。”	“必要の場合がある。”	5.3.9.1 は No.23 対応案のとおり「必要がある場合もある」とします。 5.3.9.2 も、「かもしれない」はご指摘どおり「場合がある」が妥当と考えます。次のように修正します。 「 <u>解析の再検討が必要な場合がある。</u> 」
25	C 5750 -4-3	渋谷 隆	826 851	5.3.9.1 5.3.9.2		ED	“際”は JIS では用いない。	“場合”	「際」は JIS Z 8301 の中でも使われています (5.32 「特許権などへの対応の際に」)。また、826 行は「when」に、851 行は「during」に対応していて、特に後者は「場合」とすると「場合によっては、FMEA の場合に」となり、適切とは思えませんので、このままとします。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格 番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
26	C 5750 -4-3	渋谷 隆	828	5.3.9.1		ED	“正確さ及び精度のレベルは、FMECA で既に完全な定量化がなされてい ても、採用したデータ及び方法と整合し ない形では定めないことが望ましい。”	“正確さ及び精度のレベルを、 FMECA で完全に定量化して も、採用したデータ及び方法 と整合しない場合は、定めな いことが望ましい。”	826行～827行に対応する原文は次のとおり です。a level of accuracy and precision should not be attributed inconsistent with the data and methods employed even when full quantification of an FMECA has been carried out. 「既に」だけを削除して、「正確さ及び精度 のレベルは、FMECA で完全な定量化がなさ れていても、採用したデータ及び方法と整合 しない形では定めないことが望ましい。」の ままとします。 この文章の意味は、次のとおりです。 FMECA が定量化されていると、この結果が 定量的な意味で十分な正確さと精度を提供す るよう誤解（あるいは錯覚）してしまう場 合がある。しかし、実際は FMECA の定量化 の過程で用いたデータ及び方法にはそれほど 正確さや精度は期待できないことが多く、こ のような場合では FMECA の結果ではなくそ の過程で用いたデータ又は方法論の精度及び 正確さを考慮して対応策を策定・決定する必 要がある。
27	C 5750 -4-3	渋谷 隆	902 904 1274	A.1.2 B.4.1		ED	“呼ぶ”	“いう”	今回はこのままとしますが、今後は「いう」 に統一します。
28	C 5750 -4-3	渋谷 隆	920	A.1.3		ED	“解析の詳細の度合い” 同様な意味で“粒度”が用いられてい る。	用語の統一。	「degree of detail」を「詳細の度合い」、 「level of detail」を「粒度」と訳し分けまし た。このままとします。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
29	C 5750 -4-3	渋谷 隆	979	A.2.2		ED	”信頼性性能“とは何か・ アイテムは機能だけが実現できるだけでなく、要求性能を維持する必要があり、それが信頼性であると解釈できる。	分かりやすい、誤解がない表現に変更する。	JIS Z 8115 の用語分類 e)信頼性性能 (192-05) の下には 17 の定義語があります。また、「信頼性」は、JIS Z 8115 (192-01-24) で「アイテムが、与えられた条件の下で、与えられた期間、故障せずに、要求どおりに遂行できる能力」と定義されており、注記 1～注記 7 に説明があります。このままとします。
30	C 5750 -4-3	渋谷 隆	984	A.2.2		ED	“正規の FMEA”とは何でしょうか	分かりやすい、誤解がない表現に変更する。	977 行及び 984 行の「正規の FMEA」を「形式に従った FMEA」に変更します。原文は「formal FMEA」です。 ここでいう formal とは、その分野の「形式に従った」「形式の定まった」「慣習に従った」などの意味であり、「形式に従った FMEA」とは箇条 5 の図 1 に示す方法論による FMEA のことを指します。
31	C 5750 -4-3	渋谷 隆	991	A.2.3		ED	4つの形態とは、トップダウン、ボトムアップ、定性的、定量的の 2X2 を指すのか	注記などで補足説明する。	点線の下線を付けて、次のように本文中で補足します。 「異なる形態をもつ FMEA の四つの組合せ（トップダウン又はボトムアップアプローチと、 <u>形式に従った FMEA 又は形式に従わない FMEA との組合せ</u> ）」
32	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1028	A.3.2		ED	“カテゴリー”	“カテゴリー”	このままとします。 JIS Z 8301:2019 の H.6 は「外来語の表記は、主として“外来語の表記（平成 3.6.28 内閣告示第 2 号）”による。」とだけ規定しています。この内閣告示は、「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。」と定めています。今回、委員会の同意を得て本則に従いました。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
33	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1032	A.3.3		ED	“フォールトトレランス”	“故障までの許容度”	「フォールトトレランス」は JIS Z 8115 の定義語です (192-10-09) ので、このままとします。
34	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1088	A.3.5		GE	“スプレッドシート”の例の記載がないので、“ワークシート”との違いが分からない。	スプレッドシートの例を記載する。	E.2 (1535～) に、スプレッドシートを用いた解析で一般に設ける列 (解析項目) a)～i) を記載しています。FMEA ワークシートの例は表 C.2～表 C.5 にあります。独自の例を追加する必要はないと考えます。
35	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1089	A.3.5		ED	“リレーショナルデータベースツール”	“関連するデータベースツール”	relational database は専門用語です。一般に「リレーショナルデータベース」としているため、このままとします。 1382 行にも「故障モード、機能、アイテム、構成品及び故障原因の間の幾つかの関係を扱うリレーショナルデータベース」とあります。
36	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1117 1118	A.3.7		ED	“モーター”、“エンコーダー”、“センサー”、“コンバーター”	“モータ”、“エンコーダ”、“センサ”、“コンバータ”	このままとします。 JIS Z 8301:2019 の H.6 は「外来語の表記は、主として“外来語の表記 (平成 3.6.28 内閣告示第 2 号)”による。」とだけ規定しています。この内閣告示は、「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。」と定めています。今回、委員会の同意を得て本則に従いました。
37	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1120	A.3.7		ED	“考え得る”	“考えられる”又は“考えることができる”	「考え得る全ての影響」を「考えられる全ての影響」に修正します。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/図 /表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
38	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1158	B.2.2		ED	“起こりやすさの最大から最小まで” 起こりやすさは多い少ないで表現する。	“起こりやすさの最多から最少 まで”	「又，最大値若しくは最高の起こりやすさから最小値若しくは最低の起こりやすさまで」とします。原文は「from the highest to lowest likelihood」です。 「起こりやすさ」は 3.1.11 で「何かが起こる可能性」と定義しています。B.2.2 は、定性的、定量的及び半定量的の全て含んでいます。例えば、起こりやすさが「信じられない」「起こり得ない」「起こり得る」「起こることがある」「よく起こる」で表現された場合、最低の確からしきは「信じられない」で、最高の起こりやすさは「よく起こる」になります。
39	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1221	B.3.2	図 B.1	ED	注記が図 B.1 の注記であるならば、図題名の上に記載する。	注記が図 B.1 の注記であるならば、図題名の上に記載する。	対応国際規格も、Figure B.1 の下に本文としてこの注記を記載していますので、このままとします。
40	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1480	E.2		ED	“メモリー”	“メモリ”	このままとします。 JIS Z 8301:2019 の H.6 は「外来語の表記は、主として“外来語の表記（平成 3.6.28 内閣告示第 2 号）”による。」とだけ規定しています。この内閣告示は、「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。」と定めています。今回、委員会の同意を得て本則に従いました。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
41	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1485	E.2		ED	“RAM”、“ROM”が略語 3.2 に記載されていない。	略語に追記する。	「メモリー (RAM 及び ROM) 」として附属書 (参考) に 1 回だけ出てきます。総合信頼性には直接関係しないこと、このままで理解できると判断したことから、3.2 には入れませんでした。  同様に、附属書にだけ出てくる EMC (電磁両立性) も、検討の結果 3.2 には入れていません。
42	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1494	E.2		ED	“環境によって変わる” 変化すると誤解するかもしれない。	“環境によって異なる”	「変わる」を「異なる」に修正します。
43	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1731	F.4.1		ED	“L/分”	“L/min”	L/分、L/時間で統一しているので、このままとします。 JIS Z 8301 の 9.5.2 (文章中での単位の表し方) に「時間の単位は漢字で記入してもよいが、同じ規格の文章中では、単位記号か漢字かのいずれかに統一する」とあります。
44	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1743 1744 1746 1747	F.4.3		ED	1753 行、1756 行に故障モード 1A、2A の表現がある。	機能 1 の故障モード A を故障モード 1A に修正する。	対応国際規格どおりではありませんが、このままでも混乱はないと考えますが、分かりやすさを優先して修正します。 (1743) A→1A、(1744) B→1B、 (1746) A→2A、(1747) B→2B
45	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1771	F.5		ED	“CCA”が略語にない。	略語に追加する。又は不要であれば、“(CCA)”を削除する。	対応国際規格どおりではありませんが、事例説明の中に 1 回だけ出てくる略語なので「(CCA)」は削除します。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
46	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1794	F.5		ED	“アセンブリの値をサブアセンブリレベルへ、最終的にはシステムレベルへ徐々に繰り上げていく” 階層は、(システム) > (アセンブリ) > (サブアセンブリ) なので、間違いでは。	再確認。	「この処置及び新たなアセンブリの性能を特定した後に、信頼性ブロック図又は故障の木の数式演算方法を用いて、これらのアセンブリの値をサブシステムレベルへ、最終的にはシステムレベルへ徐々に繰り上げて計算していくことが可能である。」と修正します。 ここでの sub-assembly とはシステムの下位の assembly という意味でサブシステムを意味します。従って、誤解のないように「サブアセンブリレベル」を「サブシステムレベル」に修正します。また、「数学」を「演算方法」に修正し、「繰り上げて」の次に「計算して」を挿入します。
47	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1809	F.7	図 F.2	ED	記号説明がない。	C1、D1 の記号説明を追記。	本文 (図の直下) に「ダイオード D1」「コンデンサー C1」とあるので問題ないと考えます。本来は記号説明があるとよいと考えますが、対応国際規格にも記号説明がありませんので、今回はこのままとします。
48	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1810 1811 1812	F.7		ED	“バッテリー”、“コンデンサー”、“フィルター”	“バッテリー”、“コンデンサー”、“フィルタ”	このままとします。 JIS Z 8301:2019 の H.6 (外来語の表記) は「外来語の表記は、主として“外来語の表記 (平成 3.6.28 内閣告示第 2 号)”による。」とだけ規定しています。この内閣告示は、「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。」と定めています。今回、委員会の同意を得て本則に従いました。
49	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1936	F.11	表 F.6	ED	ステップ及び仕様アイテムのセルに空欄がある。	上の行と同じであれば、計算を削除する。	対応国際規格どおりです。一例としての表なので、このままとします。
50	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1936	F.11	表 F.6	ED	箇条 F.11 にあるが、F.6 に移動すべき。	箇条 F.6 に移動する。	表 F.6 から表 F.12 はいずれも FMEA からの抜粋例です。対応国際規格でも表 F.6 はこの位置にあるので、このままとします。

※コメントの種類

GE = general(一般的)

TE = technical (技術的/専門的)

ED = editorial (JIS 用語/様式)

# JIS 案コメントシート

No.	規格番号	委員名	行番号 (例. 17)	箇条 細分箇条 (例. 3.1)	段落/ 図 / 表 (例. 図 1)	コメントの 種類 ※	コメント	変更提案	検討結果・対応案
51	C 5750 -4-3	渋谷 隆	1972	参考文献		ED	参考文献番号が付与されているが、本文中に記載されていない。	本文中に参考として引用されている参考文献には、本文中に参考文献番号を記載する。	対応国際規格と同じ記載にしています。参考文献は付番してもしなくてもよく、本文中への文献番号の記載も必須ではないので、今回はこのままとします。今後は参考文献番号の記載を心掛けたいと考えます。

以上